

基礎經濟學大系 12

國際金融論

金森久雄
荒木信義 編

國際金融論

金森久雄
荒木信義
編

12

青林書院新社

基礎經濟學大系

◆編者・執筆者および執筆分担◆

日本経済研究センター理事長 金森 久雄

日本長期信用銀行主任研究員 荒木 信義

編

大来洋一（経済企画庁海外調査課） 第1章

荒木信義（日本長期信用銀行調査部） 第2章

秋根 稔（大蔵省国際金融局調査課） 第3章

田下雅昭（日本長期信用銀行調査部） } 第4章
荒木信義（日本長期信用銀行調査部） }

窪田善次（日本長期信用銀行国際金融部） 第5章

幸島祥夫（東京銀行調査部） 第6章

上野正安（住友銀行第1部調査部） 第7章

関口末夫（日本経済研究センター） 第8章

井上宗埏（丸紅業務部調査課） 第9章

五十嵐一太郎（トーマン調査課） 第10章

国際金融論

基礎経済学大系12

昭和51年7月30日 初版第1刷印刷

昭和51年8月10日 初版第1刷発行

検印
廃止

編集者 金森 久雄
荒木 信義

発行者 逸見 俊吾

発行所 株式会社 青林書院新社

郵便番号 113
東京都文京区西片 1-3-17
電話 03 (811) 0977
振替口座 東京 1-16920

印刷／真正社・製本／難波製本 落丁・乱丁本はお取り替えます。
1333-06120-3862 © 1976

は し が き

第二次大戦後の世界経済は石油ショックによる打撃で二年後その不況に見舞われるまで順調に拡大を続け、繁栄をもたらした。これは戦後各国の採用した成長重視政策の成果といえよう。と同時に、自由で多角的な貿易経済が資源の合理的配分をもたらすという理念のもとに創りあげられたIMFのガット体制が側面から寄与していることもみおとせない。日本経済の高度成長にも対外経済交流の活発化が一役買っている。

しかしながら、いまや転機にさしかかっている。一九七一年八月の金兌換停止に始まる国際通貨の動揺は、石油ショックで、もつとなまなましいかたちをとって展開している。このなかにあつて、国際通貨制度は、その根底において変貌を上げつつある。金やドルがはたしてきた役割の一部をSDRが代替するようになっていくし、もっと重要な変化は、変動制が波及し、制度的にも認知されたことである。

国際経済のなかで生きねばならないわれわれにとって、国際環境の動向に注目する必要がある。ところが、国際金融問題を的確に把握するには、国際通貨制度および政策、国際金融市場、外国為替の仕組みについての知識が前提となるし、国際収支、国際通貨動向もあわせて検討されねばならない。しかも、これらは、理論と実情をかねている必要がある。

このような要請をみたすことは至難のことであり、従来刊行された国際金融に関する書物は、いずれか一方に片寄っているものが多く、必ずしも満足できないことが多かった。幸にして本書は、しっかりした理論をもち、実証分析にも優れた著者を得て、時代の要請に応えうるものとなっている。

したがって、本書は、応用経済学の一分野としての国際経済を救う書物として経済学を学ぶものにとって教科書として役立つとともに、社会人にとっては、国際金融に関する「読む辞書」としての役割をはたすことができる。

末筆ながら、執筆協力をいただいた諸氏、編集の労をわずらわした青林書院新社の稲葉文彦氏にお礼を申し上げます。

一九七六年七月

編者

はしがき

第一章 国際通貨制度..... 3

概 説..... 3

1 国際金本位制..... 5

- (1) 金本位制とは(㉞) (2) 国際金本位制の歴史(㉟) (3) 国際金本位制の自動調整機能(㊱) (4) 国際金本位制がうまくいった理由(㊲)

2 金為替本位制..... 10

- (1) 金為替本位制とは(㊳) (2) 成立の経緯(㊴) (3) 金為替本位制の崩壊(㊵) (4) 金為替本位制度崩壊の原因(㊶)

3 ケインズ案とホワイト案..... 14

- (1) ホワイト案(㊷) (2) ケインズ案(㊸) (3) 両案の比較(㊹)

4 IMFの誕生とそのしくみ..... 19

- (1) ホワイト案とケインズ案の妥協 (2) IMFのしくみ——払込みと引出し(㊺) (3) 平価の設定(㊻)
- (4) 為替制限の撤廃(㊼)

5 IMFの活動と国際金融協力の進展..... 23

- (1) IMF活動の軌跡(㊽) (2) IMF活動が始まるまで(㊾) (3) ドル防衛と国際金融協力(㊿)

6 IMF体制の問題点..... 27

第二章 国際通貨

概説	41
1 金(1)	44
2 金(2)	47
3 金(3)	50
4 ドル(1)	53
5 ドル(2)	56
6 ドル(3)―戦後アメリカの国際収支	59
7 プレトンウッズ体制の変質	33
(1)流動性不足とドルの信認(二七)	
(2)ドルの取扱いの非対称性(アシンメトリー)(三〇)	
(3)国際通貨制 度の改革案(三二)	
(4)ドルの信認とは何か(三三)	
(1)SDRの創出(三三)	
(2)金の二重価格制(三四)	
(3)ドルの金との交換性停止(三五)	
(4)固定相場制 の動揺(三六)	
8 フロートのひろがりと新しい国際通貨制度	36
(1)スミソニア合意の成立(三六)	
(2)スミソニアン合意の崩壊(三七)	
(3)国際通貨改革の作業(三九)	

第三章 国際収支 63

概 説 63

(1) 国際収支の概念 (六三) (2) 国際収支表の作成 (六四) (3) 国際収支の発表 (六五) (4) 国際収支と国際

貸借 (六六) (5) 国際収支統計 (六七)

1 貿易収支 67

(1) 輸出入と貿易収支 (六七) (2) 貿易収支の見方 (六八)

2 貿易収支および移転収支 70

(1) 概念 (七〇) (2) 運輸 (七一) (3) 旅行 (七二) (4) 投資収益 (七三) (5) 保険 (七四) (6) 政府取引 (七五)

(7) その他のサービス (七六)

3 長期資本収支 72

(1) 概念 (七二) (2) 直接投資 (七三) (3) 延払信用 (七四) (4) 借款 (七五) (5) 証券投資 (七六) (6) 外

債 (七七) (7) その他 (七八)

4 短期資本収支 74

(1) 概念 (七四) (2) 貿易信用 (七五)

5 金融勘定 76

(1) 概念 (七六) (2) 公約部門 (七七) (3) 為銀部門 (七八)

6	国際収支の黒字と赤字	78
---	------------	----

(1) 黒字・赤字の概念 (七)	(2) 経常収支 (七)	(3) 基礎収支 (七)	(4) 総合収支 (八)	(5) 公的決
------------------	--------------	--------------	--------------	---------

済収支 (八)	(6) 純流動性収支 (八)	(7) 各種概念の特色 (八)
---------	----------------	-----------------

7	経済成長と国際収支	83
---	-----------	----

(1) 経済成長と国際収支の問題 (八)	(2) 国際収支の変遷 (八)	(3) むすびに代えて (九)
----------------------	-----------------	-----------------

第四章	国際収支均衡政策	87
-----	----------	----

概説	87
----	----

(1) 国際収支均衡政策と通貨制度 (七)	(2) 対外均衡と対内均衡 (八)	(3) 為替レート制度と財政・金
-----------------------	-------------------	------------------

融政策 (八)

1	自動調整メカニズム	90
---	-----------	----

(1) 金本位制度のメカニズム (九)	(2) 変動為替レート制度のメカニズム (九)
---------------------	-------------------------

2	ハロッドの分類	93
---	---------	----

(1) 四つのケース (三)	(2) 金融政策と財政政策の効果 (九)	(3) 為替レート変更の効果 (九)
----------------	----------------------	--------------------

3	ポリシー・ミックス	96
---	-----------	----

(1) 資本移動と財政・金融政策 (六)	(2) ポリシー・ミックス (六)	(3) 効果的市場区分の原理 (六)
----------------------	-------------------	--------------------

4	為替レート制度と財政・金融政策	100
---	-----------------	-----

(1) 貨幣的均衡と完全な資本移動 (一)	(2) 変動為替レート制度下の効果 (一)	(3) 固定為替レート制
-----------------------	-----------------------	--------------

度下の効果 (一〇三)

5 国際収支調整と変動為替制

6 平価変更の効果

第五章 外国為替

概 説

1 外国為替の意義およびその特質

- (1) 為替の意義 (一二二) (2) 内国為替外国為替およびそのメカニズム (一二三)

2 外国為替の形態および分類

- (1) 外国為替取引の形態 (一二〇) (2) 仕向為替と被仕向為替 (一二三) (3) 並為替と逆為替 (一二三) (4) 売為替と買為替 (一二四) (5) 仕向為替、被仕向為替、並為替、逆為替、売為替、買為替等の相関関係 (一二四) (6) 外国為替手段 (一二四)

3 外国為替市場

- (1) 外国為替市場の意義 (一二六) (2) 外国為替市場の構成分子 (一二七) (3) 外国為替市場と場所 (一二八) (4) 外国為替市場の機能 (一二九) (5) 外国為替市場における取引形態 (一三〇) (6) 東京外国為替市場 (一三一)

4 外国為替銀行の機能

- (1) 為替の持高調整、資金調整および両者の関係 (一三三) (2) 外貨資金の調整 (一三四) (3) 為替の鞘取々引 (一三五)

第六章 外国為替相場

概説

1	外国為替相場の種類	145
	(1) 外国為替相場の建て方 (一四七)	
	(2) 外国為替相場の分類 (一四八)	
2	外国為替相場の理論	150
	(1) 国際貸借説 (一五二)	
	(2) 購買力平価説 (一五三)	
	(3) 為替心理説 (一五四)	
3	為替相場の決定	154
4	為替相場の安定条件	156
5	先物相場の意義	160
	(1) 先物相場 (一六〇)	
	(2) 先物為替の基礎理論 (一六一)	
6	為替相場制度	163
	(1) 金本位制度 (一六三)	
	(2) IMF体制 (一六四)	
	(3) スミソニアン体制 (一六五)	
	(4) 変動相場制度 (一六六)	
7	日本の為替相場	166
	(1) 管理貿易・複數為替相場の時期 (一六七)	
	(2) 一ドル＝三六〇円の固定相場の時期 (一六七)	
	(3) ニクソン 声明前後の混乱期 (一六八)	
	(4) スミソニアン体制の時期 (一六八)	
	(5) 変動相場への移行 (一六九)	
8	日本の変動相場	170
	(1) 変動相場制と固定相場制 (一七〇)	
	(2) 日本の経験 (一七一)	

第七章 国際金融市場

概説

- (1) 国際金融市場とは (一七五)
- (2) 国際金融市場成立の条件 (一七五)
- (3) 現在の国際金融市場 (一七七)

1	ニューヨーク市場	177
---	----------	-----

- (1) 特色 (一七七)
- (2) 市場の構成 (一七七)
- (3) 外国為替市場 (一八二)

2	ロンドン市場	182
---	--------	-----

- (1) 特色 (一八二)
- (2) 市場の構成 (一八二)
- (3) 長期資本市場 (一八六)
- (4) ロンドン外国為替市場 (一八七)

3	フランクフルト市場	187
---	-----------	-----

- (1) 特色 (一八七)
- (2) 市場の構成 (一八七)
- (3) 外国為替市場 (一八九)

4	チューリヒ市場	190
---	---------	-----

- (1) 特色 (一九〇)
- (2) 市場の構成 (一九〇)
- (3) 外国為替市場 (一九二)

5	東京市場	192
---	------	-----

- (1) 特色 (一九二)
- (2) 市場の構成 (一九二)
- (3) 外国為替市場 (一九四)

6	ユーロ市場	194
---	-------	-----

- (1) 沿革と特色 (一九四)
- (2) ユーロカレンシー市場 (一九五)
- (3) ユーロ債市場 (一九六)

7	アジアダラー市場	199
---	----------	-----

- (1) 沿革と特色 (一九九)
- (2) 市場の構成 (二〇〇)
- (3) アジアダラー市場債 (二〇一)

8	世界の金市場	202
---	--------	-----

- (1) ロンドン金市場 (二〇二)
- (2) チューリヒ金市場 (二〇三)
- (3) 金の需給と価格 (二〇四)

第八章 円の歩み

概説

- 1 戦後復興から単一為替レートまで
- 2 三六〇円レート下の工業化努力
- 3 円の購買力
- 4 円レートの評価
- 5 貿易と資本の自由化
- 6 黒字不均衡と円切上げ
- 7 石油危機以後
- 8 円レートと内外均衡

第九章 国際資本移動

概説

- 1 国際資本取引の形態
 - (1)長期資本と短期資本(二三)
 - (2)間接投資と直接投資(三四)
 - (3)直接投資の分類(三四)
- 2 直接投資の利害
- 3 直接投資の経済学

4	直接投資のパターン……………	247
	(1) 企業成長としての投資(二三七)	
	(2) 立地動機による投資(二四九)	
5	世界の直接投資……………	250
	(1) 主要国の直接投資(二五〇)	
	(2) 先進国間の直接投資(二五二)	
	(3) 南北間の直接投資(二五三)	
	(4) 産油国の直接投資(二五二)	
6	日本の直接投資……………	253
7	多国籍企業の諸問題……………	256
第十章 オイルマネーと国際経済協力…………… 259		
概 説…………… 259		
1	オイルマネーと世界経済……………	262
	(1) 国際過剰流動性(二六二)	
	(2) オイル・ショック(二六二)	
	(3) オイルマネー定義(二六三)	
2	オイルマネーと世界貿易……………	264
	(1) 工業国優位の時期(二六五)	
	(2) 開発途上国優位の時期(二六五)	
	(3) 工業国の復権期(二六七)	
3	オイルマネーと国際収支……………	268
	(1) 貿易パターンとの対応(二六八)	
	(2) 一次産品国(二六九)	
	(3) 工業国(二七〇)	
4	オイルマネーの国際還流……………	271
	(1) オイルマネーはひとりでに還流する(二七二)	
	(2) オイルマネーの規模(二七二)	
	(3) オイルマネーと開発途	

上国(二三)

5	国際経済協力の現状.....	274
---	----------------	-----

(1) DACと国連の活動(二七)	(2) 国際開発機関の活動(二七)
-------------------	-------------------

6	国際経済協力の拡大.....	278
---	----------------	-----

(1) IMF総会と公的還流(二七)	(2) 公的還流の諸形態(二八)
--------------------	------------------

7	国際経済協力の展望.....	284
---	----------------	-----

(1) 南北問題の展望(二四)	(2) 公的還流の展望(二六)
-----------------	-----------------

参考文献

さくじん

基礎經濟學大系 國際金融論

